

「近代スポーツ」を否定する「言説」について

日時：2007年7月28日、13時半－18時

場所：大阪学院大学5号館B2-02会議室

発表者および題目

1. ホセバ・エチェベステ（バスク大学体育学部教授）

“Studying the values of sports and games”

（「スポーツと遊びの価値について」）

2. クララ・ウルダンガリン（バスク大学体育学部講師）

“Expressions of a Basque Culture in a Multicultural Society”

（「多元化社会におけるバスク・カルチャーの表現について」）

この度の「21世紀スポーツ文化研究会」（大阪）は、バスクからホセバ・エチェベステ教授とクララ・ウルダンガリン講師を迎えての発表、およびディスカッションという形式で行なわれた。日本以外の他の地域からの研究者を迎えての研究会であったが、ドーピングや商業主義に苛まれる近代スポーツに臨界点を見て、これまでとは違ったスポーツ文化の行方を探るという共通した問題意識のもとで、非常に有意義な発表とディスカッションが展開された。特に、バスク地方における特有の民族スポーツに焦点を当て、近代化しきらない幾つかのスポーツの実態を紹介することで、「スポーツ」そのものを近代スポーツによる呪縛から解放とう、という視座は大いに共感できるものである。「近代スポーツ」を批判・超克し、21世紀における新たなスポーツ文化を模索しようとする同士として、今後の議論を活性化させていくためにも、私の独断と偏見に基づいた感想になることを覚悟のうえで、次に繋がるような問題提起を試みようと思う。

議論すべき点は無数にあるだろうが、ここでは1点だけに絞ろうと思う。それは、ホセバ・エチェベステ教授によって紹介された、スポーツの概念についてである。それによると、スポーツとは大きく二つのカテゴリーに分類されるという。ひとつは、“JOKOA”というカテゴリーであり、「勝つ」という目的を第一に掲げたスポーツが当てはまるという。つまり、近代オリンピックに見る近代スポーツがそれに当てはまると言えるだろう。もうひとつは、“JOLASA”というカテゴリーであり、「勝つ」ということよりも「遊び」を念頭においたスポーツが当てはまるという。

それは、人と人との個人的な繋がり強化を重視するものでもある。今回の発表とディスカッションは通訳を介して行なわれたということもあり、お互いの真意が細部まで伝わるには限界があるだろうが、「スポーツ」という概念をこのように規定すること、そのうえで「勝つ」ことを「目的」とする近代スポーツを批判することに、私はいささか疑問を抱いたのである。近代スポーツそのものは、否定されるべきなのであろうか。今や、「近代スポーツ」を批判するための手段として、「勝利至上主義」という言葉が常に用いられているのではないか。「ドーピング」や「八百長疑惑」といった諸問題を引き合いに出して、「勝利至上主義」という観点とリンクさせた「近代スポーツ」の批判が広く展開されているのではないか。しかしながら、「勝つ」ために切磋琢磨することは、果たして否定されるべきことなのだろうか。「勝つ」ということは、果たしてどうしたことなのだろうか。この種の議論には、非常に重要な視点が欠落しているといわねばならない。それは、＜暴力＞についての視点である。「近代スポーツ」を批判・超克し、21世紀のスポーツ文化を考えていくためには、＜暴力＞についての思考が欠かせないであろう。

ヨーロッパ近代の所産のひとつである、フットボールを例に挙げてみよう。一般的に、われわれは「フットボール」という概念を自明のものとして捉えている。言い換えるならば、「フットボール」というスポーツは、それとして独立した枠組みのなかで、人間が考え出したルール、および「フェアプレイ」という精神、それらを体現するプレイヤーによって成立するものだと考えられている。＜暴力＞のなかで「バイオレンス(violence)」として視覚的に認知された部分だけが、「フェアプレイ」という精神に基づいて排除されてもいる。さらに、他の近代スポーツにも共通して言えることだが、多種多様な戦術が編み出されている。特定のチームとの対戦が決まった際、相手チームに関する情報収集が最重要視される。過去の対戦成績はどうか、他の強豪国との対戦成績はどうか、欧州のクラブチームで活躍するプレイヤーを何人抱えているのか、チームを指揮する監督の戦術理論はどうか、といった客観的な情報に基づいて相手チームのレベルを把握しようとし、そこから細かな戦術や試合運びなどのシミュレーションが進められていく。試合の後には、録画された情報をもとに、プレイヤーとしてのレベルや能力が判断される。チームとしてのレベルについては、勝敗やスコア、「FIFA ランク」などの指標によって把握され、戦術面や技術面についての言説がメディアによって生み出されることとなる。

しかしながら、フットボールとは、そのような人間的な「知」の体系

によって成立しているものなのであろうか。確かに、近代スポーツとしてのフットボールは、人間によって構築されたルールや戦術によって細かく規定されてはいる。しかしながら、ピッチで繰り広げられる模様は、合理的に計算された戦術やルールそのものではない。フットボールとは、生きたスポーツなのである。確かに、フォーメーションや細かな戦術の確認も、試合を成立させるための重要な要素ではある。しかし、中田英寿も常に述べていたことではあるが、フットボールとはフォーメーションでプレイするものではない。よって、中田によれば、フォーメーションという形式にこだわった戦術批評には意味がないという。特定の戦術がどのように機能するのかは、「ケース・バイ・ケース」なのである。それは、プレイヤーの動きにも当てはまる。プレイヤーは、状況に応じて絶えず流動的に動く。優れたプレイヤーは、「オフ・ザ・ボール」の際も試合の流れを的確に読み取ることができ、周囲のプレイヤーとうまく連動しながらスペースを有効に活用する。日本のメディアによる批評と異なり、イタリアやイングランドでは、このような「オフ・ザ・ボール」の時の動きを「ファイン・プレイ」として紹介するという。もはや、意識朦朧となりながら縦横無尽にフィールドを駆け回るプレイヤーとは、特定のフォーメーションや戦術に規定されたものではないであろう。つまり、細かく規定されたルール、合理的に計算された戦術、「バイオレンス」を排除する「フェアプレイ精神」、「試合」を理論的に語るメディアによる評論などはどれも、ピッチで繰り広げられる<暴力>を「モノ」として取り扱う精神の構造に過ぎない。<フットボール>を「フットボール」として取り扱うことができたとしても、「モノ」として概念規定された「フットボール」で<フットボール>が成立するかというと、そういうわけにはいかないのである。それは、主体としての「プレイヤー」を超えた、<暴力>そのものによる「行為」なのである。

ハイデガーに言わせれば、フットボールとは、人間を生み出した<暴力>としての自然が、<暴力>としてのプレイヤーによる「行為」によって、自らを「作品」として展開する<文化>だということになる。よって、ルールや戦術によって規定された「フットボール」において「競う」ということは、<フットボール>そのものから切り離された「行為」でありながらも、その「行為」を突き動かしているのは<暴力>なのである。ジャック・デリダに言わせれば、フットボールとは、<暴力>としての人間による現実的な「行為」を拠り所としながらも、人間的な意味に解釈されることのない進行中の<暴力>の顕現だ、ということになるだろう。その<暴力>とは、人間にとって把握できるものではない。

<暴力>についての人間による言説はすべて未来において生み出されるからである。勝敗や戦術についての言説がそれである。ということは、こうも言えるだろう。つまり、フットボールにおいて自らの<暴力>を「競う」ということは、<暴力>としてのプレイヤーが自らを自己規定し、自らの能力やレベルを人間的な意味に解釈するための手段だ、ということである。「不安」に襲われるからこそ、プレイヤーは日々の厳しい練習に耐える。試合の結果によって、課題や反省点に気づくことができるのである。しかしながら、未来において生み出された言説によって、いつの間にか<暴力>の発現が隠蔽され、人間によって把握される「モノ」としての議論が活発化する。日本代表チームのフォワード陣についても、戦績やゴール数から「決定力不足」としての言説によって語られ、プレイヤーの「オフ・ザ・ボール」の際のパフォーマンスについては語られることもない。このように、「勝利至上主義」という概念を生み出しているのは、<スポーツ>を「モノ」として概念規定する構造そのものだ、ということになるだろう。

よって、近代スポーツそのものを完全に否定することが、21世紀のスポーツ文化を考える、われわれの課題ではないであろう。フットボールというスポーツは、今や世界中の人々の関心を惹きつけてやまない。数々のトップ・プレイヤーによる優れたパフォーマンスは、世界中の無数の人々を感動させる。このように多くの人々を虜にするイベントだからこそ、政治的価値や大きな経済効果が期待されたりもするのである。それは、紛れもない事実なのである。無数の人々を魅了するパフォーマンスとは、<暴力>の発現そのものなのである。それを語ろうとするとき、それはすでにわれわれの手中にはない。われわれが留意すべき点とは、<スポーツ>を規定する「神話的」な概念からどのように離脱していくのか、ということであろう。そして、「神話的暴力」というかたちで表象される神的な<暴力>に対して、どのようなスタンスを取っていくのか、ということに取り組むことこそ大きな課題であろう。このようなことを考えさせられた研究会であった。

なお、以上については、西谷修の論考によるところが大きい。逐一、参考文献を挙げることはしなかったが、正直に告白しておく。(主なものとして、『スポーツ史学会第20回大会シンポジウム報告書―「21世紀の身体」を考える』、スポーツ史学会第20回大会組織委員会、2007年3月、を参照されたい。)